

人間に固有なもの、自らの在り方への問い：生成 AI から考えて

B2321241 田口 優汰 (たぐち ゆうた)

(上智大学大学院文学研究科哲学専攻 博士前期課程)

【要旨】

生成 AI は人間の生来の能力を拡張する技術の一つとして捉えられる。この視点から論を開始する本稿は、「人間は生成 AI によって何ができるか」に着目して議論を展開する。そして生成 AI と個体としての人間の能力を検討する中で、生成 AI を種としての人間との対比でもって際立たせることが要請され、人間を巨視的に宇宙の現象から解するテイヤール・ド・シャルダンの思想を参照する意義が生まれる。テイヤールの思想圏域に則ることで、機械技術としての生成 AI が人間を不断に取り巻く状況において、我々は「研究」という仕方で自らの固有な能力を増大させ得ることが示される。

また、生成 AI が影響を及ぼすところの「私の学び」としての「哲学」がそもそも何であるかを明らかにするため、筆者が研究するマルティン・ハイデガーの思索を参照しつつ「学」と「哲学」との間の差異の問題に立ち入る。これによって、「研究」として遂行される限りでの学は、モノを対象的に捉えるという在り方ではない人間の存在の仕方を問題にできないことが示される。技術と人間の関わりが不可分であり、両者が相互に影響を与え合う以上、技術への問い、生成 AI への問いは同時に人間の在り方を問題とするのだが、ここにおいて、人間の在り方の諸可能性を問うことになる技術への問い、いわゆる技術倫理の問題が、「研究」として遂行される限りでの「学」によっては接近不可能な事柄であることが明らかとなる。技術としての生成 AI を問わんとするならば、我々は「研究」から離れなければならないのである。

【要旨 637 字】

【凡例】

1, テイヤール・ド・シャルダンからの引用は邦訳版著作集（『テイヤール・ド・シャルダン著作集』、みすず書房）から行い、巻数と該当頁数を併記して引用箇所を指示する。（例 VI:88）

なお、[]内は引用者による補足である。

I 『現象としての人間』（美田稔訳）、1974年(1969年)

II 『自然における人間の位置・人間のエネルギー』（日高敏隆・山内昭彦訳）、1972年

III 『ヒトの出現』（高橋三義訳）、1970年

VI 『過去のヴィジョン』（山口敏訳）、1971年

VII 『人間の未来』（伊藤晃・渡辺義愛訳）、1969年

IX 『科学とキリスト』（渡辺義愛訳）、1971年

2, 邦訳の引用に際して、テイヤールのフランス語版著作集（*Oeuvres de Pierre Teilhard de Chardin*, Editions du Seuil, Paris）を適宜参照し、略号 OP を用い、巻数と該当頁数を併記して参照箇所を指示する。（例 OP1 :99）

OP1 : Le phénomène humain, 1955

OP2 : L'apparition de l'homme, 1956

OP3 : La vision du Passé, 1957

OP5 : L'avenir de l'homme, 1959

OP8 : La place de l'homme dans la nature, 1956

OP9 : Science et christ, 1965

3, ドイツ語文献からの引用は全て筆者によって訳出した。その際に公刊された既訳を参考にしたが、それをその都度明記していない。

序

本稿は「生成 AI が私の学びと研究に及ぼす影響」を論じることを目的とする。筆者にとっての学びとは「哲学すること」であり、研究とは端的に「マルティン・ハイデガーの思索の研究」であるとさしあたりは言えるため、これに対する「生成 AI の影響」を論じる。

以上の目的を果たすために、本稿はまず機械技術の一つとしての生成 AI が人間の生来の能力をどのように拡張するのかという観点から、特に言語生成 AI に着目して論じる（第 1 節）。その議論の中で、個体としてではなく種として人間を捉える仕方でその能力を考察することが求められ、ここにおいてテイヤール・ド・シャルダンの思想を参照する意義が生まれる。そしてテイヤールの思想圏域から、我々が学的「研究」において自らの固有な能力を増大させる可能性を持つことが示される（第 2 節）。

次に生成 AI が影響を及ぼすところの「私の学び」、すなわち「哲学すること」がいかなるものであるかを論じるために、筆者が哲学するために研究するところのマルティン・ハイデガーの思索を参照しつつ「学」¹について論じる。これによって近代の学に特有な「研究」という様式において存在者はまずもって対象的に把握されるということ、つまり学が「研究」として遂行される限り、モノを対象的に捉えるという在り方ではない人間の存在の仕方から離れることが原理的にできないということが示唆される。ここに至り本稿は、テイヤールの思想とは別の道を模索することになる（第 3 節）。そして、技術と人間の関わりが不可分であり、そのために技術への問い、ひいては生成 AI への問いが同時に人間の在り方を問題にすることを示し、学的「研究」にとどまらない仕方でこれを思索することが可能であること（第 4 節）、またその可能な思索がひとまずは「研究」無しには成立しないことを指摘する（結）。

¹ 本稿において「学」は個別科学と科学一般を指す、広い概念として用いられることに留意されたい。

第1節 現代技術としての生成 AI

生成 AI (Generative Artificial Intelligence) について、アメリカの研究組織 OpenAI によって 2022 年 11 月に一般向けに公開された ChatGPT の言語生成 AI が広く知られている。言語生成 AI 以外にも例えば画像生成 AI などがあるが、これらは入力された情報から新たに情報を生み出すことを目的としていると言え、その意味でまさに「生成する人工の知能」である。こうした生成 AI はいわゆる「強い AI」²ではないもののそれに近く、使用者からの高度な要求に応える能力をもつ。例えば、論文の要約を言語生成 AI に指令すればその要求に応え得るし、あるいは研究者が何らかの実験のために装置の設計を行う際のプログラミングの補助などが生成 AI によって可能となっている。この他にも多岐にわたる事例があるだろう。このように生成 AI の使用は、研究における時間的コストの節約につながり、新たに生まれた時間で研究者はさらに研究を進展させることができ、生成 AI は研究者にとっての補助装置となる一面がある。他方で生成 AI の使用についていくつかの問題点を指摘することもできる。生成 AI の特筆さが「生成すること」であるならば、その生成物の影響から考慮された問題点が明らかとなるだろう。この観点から、例えば情報漏洩や著作権侵害の恐れなどを挙げることができる。だが我々は技術による人間の能力の拡張という観点からも生成 AI を問わねばならない。というのも、概して技術は人間の能力を拡張するものとして捉えられ得るのであり³、その限りにおいて、<人間の生来的な能力>が技術によってどの程度まで<拡張された能力>となるかが重要であるからだ。言うなれば、「人間は生成 AI によって何ができるか」あるいは「生成 AI には何ができない

² 「強い AI」とは端的に、人間と同様に思考し、心をもつ人工知能のこと。なおジョン・サールによればこうした「強い AI」を求める見解には、「人間の心には本質的に生物的な契機はまったくない」という考えが反映されている。(サール『心・脳・科学』土谷俊訳、28 頁参照。)

³ 技術や道具についてこのように捉える代表的な例として、マーシャル・マクルーハンの思想を挙げることができる。(マクルーハン『メディア論：人間の拡張の諸相』栗原裕・河本仲聖訳)

か」⁴という問題に我々は気を配る必要がある。そのことを踏まえた上で、学術研究に特に関わると思われる言語生成 AI に着目し、生成 AI の問題点をいくつか提示することから始める。

第一に、生成 AI が学習する情報量に偏りがある場合、生成結果にも偏りができてしまう懸念がある。これはつまり生成される情報が不正確である可能性があるということの意味する。しかしそもそも人間が何かを生成する場合にも同様に偏りと不正確さが発生する可能性があることを考えれば（学的研究において「査読」があるのはそうした理由もあるからだろうが）、それが生成の特筆すべき問題点であるとは言い難いだろう。

第二に、AI による情報生成過程が複雑化していることによって、生成の際の判断基準が特定できないということがある。生成 AI に限らず、ディープラーニングという学習手法をとる AI は入力された情報から規則性を見出し自動で特徴量を抽出するのだが⁵、この特徴量を抽出する基準は生成結果から判別することはできない。このような、思考過程における規則の不明瞭さという事態は人間においても同様に見られるものの、人間の場合は自身の思考をあたかも何らかの規則に則っているかのように形式化でき、人間の言明やその他の活動に論理的普遍性を与えることができる。他方で生成 AI が生成を行う際の判断基準の特定が困難である限りで生成物における論理的正当性は低く、その点で生成されたも

⁴ 人工知能についての古典的な著作である『コンピューターには何ができないか』においてヒューバート・ドレイファスは、人間についての現象学的分析によって、人間の認知の仕方がプログラムのように形式化できないものであることを示し、そのために人間と同等の知能の作成を目指す当時の人工知能研究の潮流が必然的に失敗すると断じた。ただしドレイファスは情報理論の父であるクロード・シャノンの次の言葉を引きながら、現在の我々が目にしているような人工知能の開発が可能であることを予見している。「パタン認識、機械翻訳などの問題に対して効果的な機械は、われわれが今日手にしているのとは異なったタイプのコンピューターを必要とする。わたしの感じでは、それは10進法に基づく逐次操作ではなく、パタンや概念、漠然とした相似性を用いた操作を本質とするようなコンピューターだろう。」（ドレイファス『コンピューターには何ができないか』黒崎政男・村若修訳、517頁）

⁵ 谷口忠大『イラストで学ぶ 人工知能概論 改訂第2版』、224-228頁参照。

の（文章）がそのまま学術論文の要件を満たすとは言えない。

第三に、生成 AI は自身の生成物の正確さについての関心が皆無である。出力された結果と、その結果を出力する過程の正確さに関して生成 AI が自らフィードバックを与えることはない。人間も自身の行為についてのフィードバック能力はそこまで高くないかもしれないが、組織や共同体を成立させることで不正に対するある程度の自浄作用をもつことが可能である⁶。蓋し、仮に生成 AI の生成時間を倍にしたところで、特徴量抽出の基準の妥当性を検討することがない生成 AI が自身の間違えに気づくことはない。

さて、生成 AI の問題点を人間の能力と比較して提示する以上の試み、換言すれば「生成 AI には何ができないか」の考察は、一方で「人間の不完全さ」を浮き彫りにしている。人間は往々にしてバイアスを持ち、規則的な思考を普段から遂行しているわけでもなく、また自らの不正や間違えに気づかないことが少なくない。だが同時に言えるのは、種全体としてみれば人間はそうした傾向をある程度改善できるということであり、つまるところ、生成 AI にできないことは人間にもできない場合が多々あるのだが、種としての人間であれば生成 AI 単体よりもはるかに多くのことを成し得るため⁷、生成 AI と人間の能力の比較

⁶ 他人に指摘されるまで、自身の間違えに気づかないことは往々にしてある。また、例えば常習的に窃盗を行う人間が、ある時天啓をうけて改心する可能性はあるにしても、突如として自身の行為の不正を正すことは難しいように思われる。しかし法などの諸制度を立てることのできる人間は（法はそのためだけにあるのではないのだが）、種としてそうした不正を取り締まる能力をもつ。また当然のことながら、それぞれの人間にも自身の間違いに気づく能力はある。日本の義務教育を受ける小学生の多くには、テストを解き終えた残り時間で解き直しをし、自身の間違えを訂正する能力があるだろう。

⁷ すでに見たように、人間はその複数性によって自らの可謬性の程度を下げている。そしてこれと同様に、異なるシステムを持つ生成 AI 同士を協同させた場合も同じことが起きるかもしれない。つまり生成 AI も複数揃えば、人間と同様に生成結果の偏りのレベルを下げることもできるかもしれないという問いがここで生じる。

複数性は人間だけではなく生成 AI を条件づけ得る。そうであるならば、本稿の議論は些か性急であることになる。本稿を補うために、「労働」や「生そのもの」に注目した考察が必要であるかもしれないが、これについては他日を期すことにする。

は、**個体**としての人間よりもむしろ**種**としての人間に着目して進めた方がその差異をより明らかにすると考えられる。すなわち、**種**としての人間はその能力を生成 AI によってどの程度拡張するのかが問題となるのだ。

第2節 テイヤール・ド・シャルダンから見る機械技術としての生成 AI

ここに至り、20 世紀の科学者、神学者、あるいは神秘家⁸であるテイヤール・ド・シャルダンの思想を生成 AI の考察のために参照することの意義が高まる。というのもテイヤールの思想圏域において人間に固有な能力（あるいは現象）である思考力とその産物である機械技術は、宇宙全体の有機的な運動の一過程である人間という種としての現象に則して考察されるのであって、このように**個体**としての人間を超えた**観点**から**種**としての人間を機械技術としての生成 AI との対比を通じて考えていく試みが本稿の議論においても必要とされるからだ。もちろんテイヤールの時代において生成 AI は未だ登場しておらず、生成 AI を検討するにあたって彼の思想を参照する際には、生成 AI に限らない機械技術全般に関する彼の議論に注目するという仕方となる。以下ではテイヤールの思想を参照しつつ、機械技術としての生成 AI の特徴を考察する⁹。

テイヤールの機械技術¹⁰に対する評価は概ね肯定的である。というのも人間における**思考力**という現象を「世界の全体的な進化の過程で元来準備されてきた、ひとつの重大段階」¹¹として解し、そしてそれが最終的に進化の究極点である「オメガ点」¹²へと至るものとし

⁸ リュバック「ピエール・テイヤール・ド・シャルダンの宗教思想（6）」美田稔訳、『CONVERGENCE』18号、27-29頁参照。

⁹ 技術を使用されるものと捉える限りで、技術はそれを使用する人間を尺度として評価される。この限りで、技術への問いは常に人間への問いとして遂行されることになるのだが、これについては本稿第4節にて取り上げる。

¹⁰ 例えばテイヤールは電子計算機、つまりコンピューターを挙げる。(Cf, II:126)

¹¹ VI:199f

¹² I:310

て捉えるテイヤールにおいて、そうした特異な現象としての人間の産物である機械技術は進化の極へと向かう運動の一端を担うものとして理解されるからである。このような観点において、機械技術は思考の能力を代行し増大するものとして捉えられ、その結果として空いた思考の労力は研究へ向かうべきものとされるが¹³、同時に諸々の技術は人間という集団によって有機的に組織された統一性の実現に寄与するものとして捉えられる¹⁴。このように機械技術は徹頭徹尾、人間活動の延長とみなされるため、テイヤールの思想に則れば生成 AI は人間の活動にある種従属し人間の固有な能力を増大させるものとして考察されることになる。

では機械技術は人間の能力を常に増大させるのか。むしろ人間の能力を損なうことはないのだろうか。管見ではこのような恐れについてテイヤールはあまり言及していない。技術による人間の自由なエネルギーの増大は歓迎すべき事態であって、機械技術をあれこれ非難して進化へ向かう進展に歯止めをかけるべきではない旨が言われるように¹⁵、テイヤールはむしろ人間に特有な内省によって機械技術が推進する生命の進化の歩みを遅らせることへの懸念を示している¹⁶。他方で彼が強調するのは、人間の固有なエネルギーを生命の進化に則った方向へ、つまり「研究」へ向かわせるべきということであり¹⁷、技術と人

¹³ 「ヒトのエネルギーの転化がその本来の重要さにまったくふさわしく志向しているのは、休養という形式でもなければ戦争という形式でもなくてたしかに第三の形式、すなわち研究という形式[la forme Recherche]の方向へであることは、すこしの狂いもなく、日ごとに明白になりつつあるからである。(III:226)(OP3:223)」

¹⁴ 「人類は道具による地球支配を、単に地上での生存競争に勝ち抜いて、自分の世界を樹立するために役立たせているばかりではなく、人類自身の中にひとつの有機的な真の統一性を確立するために使っているのである。(VI:67)」

¹⁵ Cf, III:224

¹⁶ 「努力に身を投じたり、努力を拒否したりする自由をもつヒトは、生命を判断したり批判したりするという恐るべき能力をもつことになる。(VI:88)」(この能力を乱用すれば、「たちまちにして生命の勢いは弱まり、停滞し、下降してしまう。(VI:89)」

¹⁷ (機械によって労苦から解放された自由なエネルギーに対して、不安感からそれを制御する措置が往々にしてとられるが、)「けれど真の手段といえ、それはむしろ、この流れ

間との関わりを深めていくことである。しかしながら、テイヤールは技術の使用について盲目的に賛同しているわけではなく、人間が制作したものに使役されることへの警鐘を鳴らす¹⁸。このように技術の使用を押し進めつつもそうした事態に甘んじることなく、技術による便益を絶えず研究（探求）において昇華させることをテイヤールは示している。ただし、機械技術が人間の能力をかえって損なってしまう可能性への問いは彼において目立たない¹⁹。

テイヤールの思想が示す人間と機械技術の連関についてまとめると、次のようになる。すなわち、科学は機械技術等を補助としつつ「研究」として遂行され、一方で人間に固有な思考力という現象の一つの帰結としての内省もまた増大する。この内省は時に技術の使用を妨げ、ひいては宇宙の進化を阻害するが、畢竟、研究（探求）を進めることによって、機械技術を紐帯として「研究」と内省との一体化がかなう²⁰。つまりテイヤールによれば、人間の固有な能力を高めるための機械技術の使用は学的研究においてこそ可能であ

をそれが自然のおもむくままに導いてゆく傾斜に沿って、つまり模索(recherche)[研究、探求]の方向に流してやることではないだろうか？(II:119)(OP8:151)』

¹⁸ 「今日では、われわれが気づきさえもしないほどの速さで起っている均衡の変転の結果、われわれは、個体一人間は、考えようによれば、自分の作り出したものに使役される身になり果てたと覚りはじめている。(II:181)』[訳文まま]

¹⁹ 蓋し、恐らくテイヤールは、人間が機械技術に使役されるという事態も、研究の進展次第によって解消することができると考えている。このように機械技術に対するテイヤールの評価は楽観的なものとして映る。しかし、「「多」が、オメガという至高の有機的統一へと集中していく過程はこのうえもない労苦を表している。(IX:91f)」と言われ、このことを「十字架の苦しみ」と類比的に語るところを鑑みれば、テイヤールを楽道家として断ずることは退けなければならない。

²⁰ コンピューターなどの機械技術は、人間の集団的な思考を実現する共通脳髓の形成の一環として理解され、探求[研究 la Recherche]は個々別々にではなくある種のチームとしてなされることが言われる (Cf, VI:204-217)(Cf, OP5:213-221)。テイヤールのこうした考えは、「精神圏は、思考の巨大な機械である(VI:213)』[精神圏とは、思考のための一つの巨大な機械である La Noosphère, - une immense machiène à penser(OP5:220)]という言葉に集約されていると言える。

るのだ²¹。

第3節 研究としての学、そして哲学

テイヤールの思想に則ることで、我々が「研究」において不断に機械技術を使用し続けることで、人間の固有な能力が増大する可能性が高まるということが示された。つまり我々は「研究」において機械技術としての生成 AI を使用することによって、人間に固有な能力を拡張できるかもしれないのである。では、生成 AI は「私の学びと研究」においてどのような位置を占め、その中でどのようにして人間の固有な能力に関わることになるのだろうか。

「私の学びと研究」とは筆者において、「私が哲学することとそのための研究」である。しかしそもそも哲学、あるいは哲学するとはいかなることか。これを明らかにしなければ、哲学、そしてその研究における生成 AI の役割を論じることはできない。

哲学の伝統において、<哲学とは何か>を問うためにしばしば、古代ギリシアのアリストテレスの思想に遡る試みがなされるのだが、そこで見出されるのは今日の我々が「科学」と呼ぶものの萌芽である²²。ここで「哲学」と「科学」の差異という問題が避けられないものとして現れる。果たして哲学は科学の一つなのか、あるいは哲学は科学になれなかったものなのか。

本節では哲学と科学の差異の問題に立ち入りつつ<哲学がいかなることを為すか>を示すために、筆者が哲学するために研究するところのマルティン・ハイデガーの思索を参照

²¹ (諸々の機械技術は、)「人類にとっての真の神経系統の創造であり、人類全体としての、(心理学的領域における、個人の抑圧を伴わないところの) 共通意識の形成なのだ」と私は言いたい。(VI:69)」

²² アリストテレスだけでなくプラトン、あるいはタレスやパルメニデスといった古代ギリシアの思索者へ遡ってみても、現在の我々によって「知」と呼ばれ得るものに彼らの思想が向かっている限りで、アリストテレスが「最初に哲学した人々」と呼んだ人々のうちに「学 Science」の起源を見出すことは容易い。もっともこのことだけでもって彼らの思想が「科学的」であるとか、「神話的」でないなどと断定することはできない。

する。それというのもハイデガーの思索がまさに哲学と科学の差異という問題に的中するものであり、並びに筆者が哲学することとそのための研究に対する生成AIの影響を明らかにするという本稿の目的に適うからである²³。そしてハイデガーと共に思索することで我々は、「研究」という学的様式と「哲学」の営みとの間のズレを確認することになる。

ハイデガーは「世界像の時代」という講演において「学」を明らかにするために、近代の学における「研究 Forschung」という事象に注目する。彼によれば研究とは、それがいかなる領域を取り扱うかを予め決定しており、研究が存在者を認識する仕方はその予め決められた領域に則る、つまり科学的研究においては或る「見取り図」のようなものが根本にあるとされる。些か抽象的ではあるもののここでハイデガーが示すものは、諸学の対象とする領域が研究に先立って決定されており、研究は研究される事柄がなければ当然成立せず、諸学は自らの探求の向かう先を研究に先んじて規定しているということである。これはノーウッド・ハンソンが『科学的発見のパターン』において「観察の理論負荷性」を示すことで提起しようとした問題に構造としては似ている。ハンソンが示すのは、人間の観察、科学者による事実やデータの理解には理論が組み込まれているということ、換言すれば、観察はその前提となる理論から中立のものではないということである。他方ハイデガーにおいてはそうした理論もつねにすでに或る「見取り図」を前提としていることが見て取られ、その意味でハイデガーが明らかにしようとしているものは「理論の見取り図負荷性」とも言える。つまり研究として遂行される学は理論に先んじて見取り図を描き、研究される事柄を予め決定しているとされるのだ。では、「見取り図」とは何か。このことは「世界像の時代」より後の時期の講演「科学と省察」において、より具体的な仕方でも明らかにされている。では、「見取り図」とは何か。このことは「世界像の時代」より後

²³ なおハイデガーの思索においては科学に対する挑発ともとれる言辞が見出されるのだが、畢竟、これは科学の成果を貶めるものでは断じてなく、科学的研究によっては取り扱うことのできない領域を我々が思索できるということを示唆するものであることを予め留意されたい。

例えばハイデガーの講演「思索とは何の謂いか？」において、「科学は思索しない」という言葉がある(Heidegger, *Martin Heidegger Gesamtausgabe*, Band7, S133)。一見すると科学を蔑視する言明にとれるが、これは端的に、<研究として遂行される科学は人間の思索する力を存分に発揮できていない>という事態を指しているに過ぎない。

の時期の講演「科学と省察」において、より具体的な仕方で明らかにされている。

「科学と省察」において、科学が「理論として既に対象性によって限定された領域に固定されている」²⁴ことが言われる。畢竟、これは科学の理論が現象をまず対象として捉えることに依っているということであり、「世界像の時代」において言われた「見取り図」もそうした前理論的な事態を指している。ハイデガーのこの洞察を否定するのは難しい。というのも学問が科学的であるならば、それが歴史学であれ生物学であれ何らかの対象に向かっていくことは自明のことにように思われるからだ。そしてハイデガーは「世界像の時代」と「科学と省察」のどちらにおいても、学こうした対象的な存在者把握の仕方が近代以降に決定的になったことを明らかにする。本稿ではこれについてのハイデガーの議論の展開を具に見ていくことは叶わないが、彼が示しているのはモノを対象的に捉えることが人間の唯一の存在の仕方ではないということである。このことを徹底的に熟慮しない限りで、あらゆる学は思索を疎かにしているとハイデガーは診断する。モノを対象的に捉える「研究」に従事するあらゆる学は、そうした存在者把握の仕方を自明のものとして根底に据えてあらゆる活動を行なっているのである。この「研究」という様式は当然のことながら「哲学」の領域でもあり得る。対象的な把握によって文献内の記述の整合性を確認することがなければ、「哲学研究」はただの言葉遊びに終始するだろう。哲学も「研究」として学的に遂行され得る。この点で哲学と科学を根本から区別することはできない²⁵。しかし、ハイデガーが示しているのは、我々が自らの固有な能力によって、対象的な存在者把握ではない仕方の我々の在り方を思索することができるということである。他方で、学が研究に際して基礎とする我々の在り方を逐次問うていたら、科学的な成果を出すことはできないだろう²⁶。すな

²⁴ Heidegger, *Martin Heidegger Gesamtausgabe*, Band7, S57

²⁵ つまり、存在者の対象的な把握によって遂行される研究としての哲学（哲学研究）と、そうではない仕方でなされる思索としての哲学は区別されなければならない。

²⁶ 成果のための必要条件ではない諸問題を顧みることは研究の遅滞をもたらす。そしてこのことは過当競争下にある現在の科学研究においては研究そのものの存亡に関わる。

わち自らの成果のみに固執する限り、学は人間の在り方を十全に問うことはできない。では果たして我々はこの自らの在り方の可能性を思索する力を存分に発揮することはできるのか。ハイデガーによれば哲学はここに懸かっている。研究としての学が問題にし得ない我々の在り方の可能性について哲学は思索することができるのだ²⁷。ここに至り、「研究」という仕方において我々は自らの固有な能力をむしろ制限してしまう、という主張が帰結する。

第4節 技術への問い、生成 AI への問い、人間の在り方への問い

技術と人間は相互に関係している。電話、自動車、飛行機、月探査船は距離についての人間の観念を変容させ、紙やコンピューターは人間の情報伝達のあり方を変え²⁸、ガス室や現代医療の延命装置は人の生命としての終わり方の可能性を増やした²⁹。核兵器は言わずもがな 21 世紀の国家間のある仕方規定している³⁰。人間の能力を増大させある

²⁷ ここには奇妙な逆転が見られる。科学が哲学から分化したものであるとすると、ここで見出されるのは哲学が自らの末裔としての科学によって自らを規定しているということである。なお、本稿では十分な仕方規定することはできなかつたが、ハイデガーの思索はたんに哲学と学の差異をそれぞれから規定するものにとどまらない。というのも、彼は世界の原初的な経験から要求される思索そのものを問題にすることで、哲学/学という二分法を超えた思索の在り方を提示せんとしているからである。それゆえに、筆者はハイデガーを哲学者と呼ぶことに若干の躊躇いがあるし、筆者の自らの学びを「哲学すること」と名指すことについて十分熟慮がなされなければならないと考える。

²⁸ 電話も情報伝達のあり方を変化させているし、紙やコンピューターは距離についての観念を変容させている。このように技術の影響は人間の一つの側面にとどまらず、人間に対して総合的な変容を促すものであると言える。

²⁹ 両者は人の生命の終わりという観点から並列され得る。ただし忘れてはならないのは、前者において人は人として死を能わないということである。死が人間に特有なものであるならば、人間の在り方（所在）への問いにおいてそれは中心的に思索されなければならない。ハイデガーが（後期においても）死を存在の語りにおいて問うたのはそのためである。なお、医療の延命装置に関する死（あるいは生）は、たんに技術的なものにとどまらず、政治的な問題として論じられ得る。これについては例えばジョルジョ・アガンベンが詳論している（アガンベン『身体の使用』上村忠男訳、第3部参照）。

³⁰ 当然のことながら国家間における安全保障上の問題は核兵器の使用にとどまらず、半導体の生産やそのための鉱物資源、あるいは食料の自給的生産と確保などが複雑に関わっている。しかしまた、世界終末時計における論議が核の脅威だけではなくむしろ気候変動に

いは損なう可能性がある限りにおいて、我々は何らかの技術の影響を絶えず受けて自身の能力を伸縮させている。人間と技術とが相互に入り混じっている現実を鑑みれば、技術への問いは人間の存在の仕方を明らかにすることなのであり、生成 AI がある種の技術である限り、生成 AI の人間への影響を考察することは人間の在り方を問うことなのである。

さて本稿第3節でハイデガーの議論を参照して示したように、学は対象的な存在者把握という人間の在り方において遂行される。学はこの一様な人間の在り方から諸々の実験等を成立させ、そのために学的研究の成果は押し並べて人間の特定の在り方に則した産物となる。換言すれば、学は研究として遂行される限りで人間の在り方の別の可能性に関わることはない。この意味で人間の存在の仕方の諸可能性への問いは学の埒外にあり、人間について真に思索することは学的研究には不可能なのである³¹。このことを踏まえれば、人間の在り方を問題として含む技術への問いは、そして生成 AI への問いは、学的ではない仕方になされなければならないことになる。つまり生成 AI の人間（あるいは我々の学び）への影響という問題は、学的に問うことのできないものなのだ。それゆえ我々は自らの思索する力を蔑ろにしないためには研究としての学を離れなければならず、「生成 AI が私の学びと研究に及ぼす影響」は学的ではない仕方では思索されねばならない。

諸学が生成 AI の使用について考えようとする限り、つまり生成 AI の人間への影響を考えようとする限り、諸学は自らの研究から離れた思索へ向かうことを求められる³²。そう

関するリスクを中心とする現状を考えてみれば、環境保全とそれにまつわる技術についての国家間の取り決めが我々を少なからず規定していることは明らかである。

³¹ このことは研究として遂行される限りでの哲学においても同様である。そのためここで主張されているのは、「人間そのものへの問いが哲学のみに可能である」ということではない。「科学は思索しない」というハイデガーの言葉は、「哲学」に対する批判としても妥当する。

³² このことは、「<認識の対象>としての人間」が「自然科学全部門の鍵」であるとするテイヤールにおいても同様である(Cf, I:339f)。テイヤールにおいて、諸学は<対象としての人間>を出発点として人間の諸可能性を問題にするものとされる。しかし、そのようにして展開された諸学が獲得する成果は、<対象としての人間>を前提とした<諸情報>であり、<対象ではない人間>は問題外である。他方で我々が<対象ではない人間>の在り

した仕方では生成 AI は私の学びと研究に影響を及ぼしている。技術としての生成 AI への問いにおいて同時に問題となる人間の在り方、諸可能性、これを思索することができる我々が、自らの思索する力を制限しないことを望むのであれば。

結

学的研究は存在者の対象的把握にとどまっているものの、まさにそのことによって体系的な研究が可能となっていると言える³³。理論同士を突き合わせて比較検証するためにも、やはり理論は体系的であることが求められる。では、本稿が示してきた人間の在り方への

方を希求しそれについて考えることができる（少なくとも考えようとすることができる）以上、＜対象としての人間＞を「自然科学全部門の鍵」とするテイヤールは、人間の思考力を不当に制限していると言わざるを得ない。

しかしテイヤールの思想はまた、「思考力」という現象を生命の有機的進化の過程の重大事とみなし、思考力の増大が希求されかつその損失を危惧しており、＜人間の思索する力を蔑ろにしない＞という本稿の議論とむしろ軌を一にするものである。

³³ ここでは本稿が論じてきた事柄を総括するために「体系」という言葉を用いているが、「体系」が孕む問題と諸可能性について詳論する力を筆者は今のところ持っていないため、「体系」についてのより深い思索は本稿では差し控えざるを得ない。次の例が適切かどうかは定かではないが、「体系」をさしあたり示すために取り上げる。

図書館は「体系的」である。そこでは著者や出版社や分野に則って分類番号が振られており、「体系的」な研究を行おうとする我々を助けてくれる。だがしばしば、或る「体系」のうちで整合性が取れないような事態を我々は見出す。それは例えば、上智大学図書館が所蔵するテイヤールのフランス語版著作集が、2階、8階の分類B棚、8階の分類BD棚、9階とバラバラに配架されているような事態である。ここでは図書館の「体系」と、著作集を網羅的に読もうとする私（筆者）の求める「体系」とに齟齬が生じている。しかし、図書館の「体系」内に齟齬はないかもしれない。1人の思想家の著作集が4つの階に分けて配架されている理由は、著作集それぞれの巻の内容からして必然なのかもしれない。そうであるならば、図書館の「体系」が訂正される必要性はあくまで私（筆者）の「体系」を鑑みた場合に発生していることになる。同様に、筆者の「体系」もまた別の誰かの「体系」から見れば修正が施されるべきものかもしれない。

つまり体系には可謬性がある。だからといって我々は体系ではない非体系性へとすぐに赴くことはできないということもこの例は示している。図書館が「非体系的」であったなら、それがどのような事態であるか我々には想像できないほどにカオスであろうし、テイヤールのフランス語版著作集はこれまで以上に不規則に配架されるかもしれない。

問いは体系的になされ得るものなのだろうか。否、恐らくそれは非体系的になされる³⁴。ただし、非体系性へと向かうには逆説的だが既に体系的でなければならない。それゆえ体系的な知を求め、対象的な存在者把握に既に慣れ親しんでいる我々が非体系性へと向かうためには、つまり人間の在り方の諸可能性を問うためには、あくまで体系から出発する必要がある。そうした越境的で、しかし我々そのものに関わる思索をいかになすか。その道ゆきの過酷さ、自らの思索そのものに向き合うことの難しさを、詩人ヘルダーリンの次の言葉を引いて示すことで本稿を締める。

固有なものの自由な使用が最も困難である。³⁵

【本文 7977 字】

【引用・参考文献】

本稿が参照した文献は以下の通りである。なお、テイヤールとハイデガーによる著述についてはすでに凡例にて明記したため、ここでは列挙しない。

<日本語>

アガンベン, G. (2016) 『身体の使用』 (上村忠男訳)、みすず書房

サール, R. J. (2005) 『心・脳・科学』 (土谷俊訳)、岩波書店

谷口 忠大 (2020) 『イラストで学ぶ 人工知能概論 改訂第2版』、講談社

リュバック, H. (1993) 「ピエール・テイヤール・ド・シャルダンの宗教思想(6)」 (美田稔

³⁴ 体系、あるいは理論が対象的な存在者把握以外の仕方をとることができないとすれば、本稿が提示してきた人間の在り方の諸可能性への問いは、体系的ではなく非体系的になされるしかないと言える。

³⁵ Hölderlin, *Sämtliche Werke*, Band6-1, S426

訳)、『CONVERGENCE：日本ティヤール研究会誌』第18号、10-62頁、日本ティヤール研究会

ドレイファス, H. L. (1992) 『コンピューターには何ができないか：哲学的人工知能批判』
(黒崎政男・村若修訳)、産業図書出版

ハンソン, N. R. (1986) 『科学的発見のパターン』(村上陽一郎訳)、講談社

マクルーハン, H. M. (1987) 『メディア論：人間の拡張の諸相』(栗原裕・河本仲聖訳)、み
すず書房

渡邊 二郎 (1992) 「シェリングのエルランゲン講義：ドイツ観念論研究覚え書き」、『放送大
学研究年報』第10号、51-77頁、放送大学

<ドイツ語>

Heidegger, M. *Martin Heidegger Gesamtausgabe*, Vittorio Klostermann, Frankfurt am
Main. 1975ff

Band5. *Holzwege*, 1977

Band7. *Vorträge und Aufsätze*, 2000

Hölderlin, F. *Sämtliche Werke. Große Stuttgarter Ausgabe*. hg. von Friedrich Beißner.
Kohlhammer, Stuttgart. 1943-1985.

Band6-1. *Briefe: Text*, 1972